

New York Times にみる関係代名詞制限用法 *which* の近年の 使用頻度変化と Orwell にみる 1940 年代の英国用法との比較

小 西 和 久

(早稲田大学)

1. はじめに

The New York Times (以下 NYT) などの英米の一流紙は、関係代名詞を使用する際に「*that/which* ルール」の遵守を重視している。先行詞が人間やニックネームが付けられた動物以外の場合には、制限用法では *that* を、非制限用法ではカンマを打って *which* を用いる、というルールである。しかし、通常はこのルールを遵守する英米のメディアや小説家など (以下、careful writers) は時折、このルールを破って *which* を使うことがある。この現象は長年にわたり多くの文法や語法の専門家の注目を集めてきたが、なぜルールが破られるのか、違反の仕方に英米で違いがあるのか、といった点に関する包括的な説明は未だに見られない。また、違反頻度は、1900 年代を通じて特に米国英語で減少しているとの指摘が多いが、何がその原因なのかについても結論は出ていないように思われる。

本稿では、NYT が 1985 年と 2018 年に報じたそれぞれ約 100 万語相当の記事を参照し、関係代名詞制限用法 *which* の用法と使用頻度が約 30 年間にどのように変化したかを考察する。併せて、明晰な文章で知られた英国の作家・ジャーナリスト George Orwell の“Politics and the English Language”と題する 1946 年のエッセーにみられる用法と NYT の用法とを比較する。英米の制限用法 *which* に関する詳細な用法上の比較は筆者が知る限りこれまでなされておらず、年代が大きく異なる「米語」と「英語」の間で基本的な違いがあるのかどうかとも検討したい。

2. 英国と米国における制限用法 *which* の使用頻度の違い

先ず、英国と米国における *that* と *which* の使用頻度は、どの程度異なるのであろうか。例えば、Hinrichs et al. (2015 : 820) は、1960 年代初頭から 1990 年代初頭の 30 年間に、英国と米国で執筆・編集・出版された標準的な英語文章(written-edited-published standard English)で主格または目的格の関係代名詞制限用法における *that* と *which* の使用頻度がどのように変化したかを調査している。データはコーパスを用いて、60 年代初頭に関しては、英国は Lancaster-Oslo/Bergen (LOB)、米国は Brown、90 年代初頭に関しては、英国は Freiburg update of LOB (F-LOB)、米国は Freiburg update of Brown (Frown) から抽出している。いずれもメディア・科学・小説・その他一般の 4 分野の文章で構成される約 100 万語規模のコーパスで、4 つのコーパスの総語数は約 400 万語となる。4 つのコーパスから抽出した *that* と *which* の総数は 13,192

でそれぞれの使用頻度は国別・年代別に図1の通りとなっている。

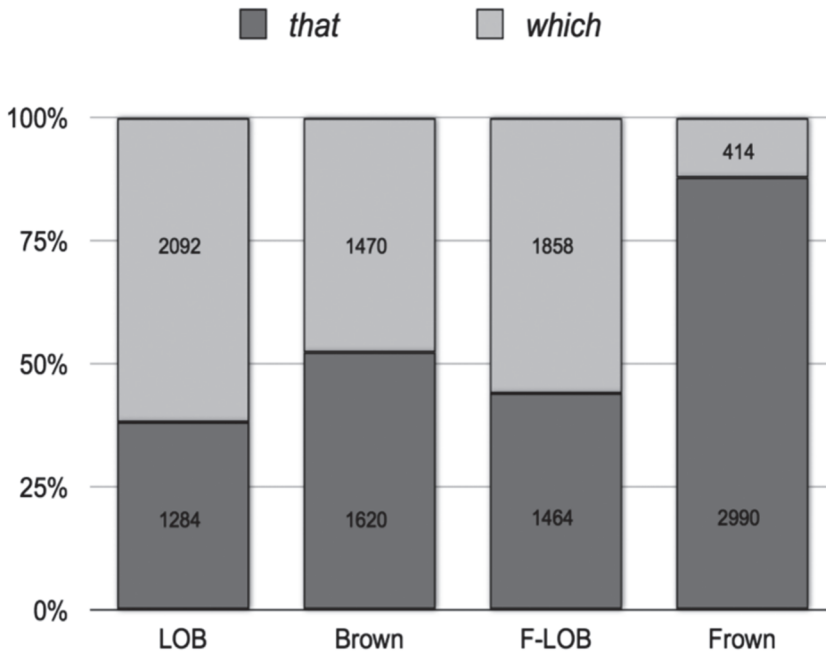


図1

このデータを比較しやすいように次の表1に整理してみた。

コーパス	対象国	年代	<i>that</i>	<i>which</i>	<i>that/which</i> 合計
LOB	英	1961年	1,284 (38%)	2,092 (62%)	3,376
Brown	米	1961年	1,620 (52%)	1,470 (48%)	3,090
F-LOB	英	1991年	1,464 (44%)	1,858 (56%)	3,322
Frown	米	1992年	2,990 (88%)	414 (12%)	3,404
総数	—	—	—	—	13,192

表1

上記から 60年代から 90年代の 30年間に英米で起きた変化は次のように纏めることができよう。

- ① 英国では *that* と *which* の総数が 3,376 から 3,322 へ 1.6%減少する中、総数に占める *that* の比率は 6%増加している。
- ② 米国では *that* と *which* の総数が 3,090 から 3,404 へ 10%増加する中、総数に占める *that* の比率は 36%と著しく増加している。

制限用法の *that* と *which* の使用頻度の変遷に関しては、1900年代前半に *which* が逡減、*that* が逡増した後、1900年代後半に *which* が急減・*that* が急増し始め、これ

らの変化は特に米国で顕著、との指摘が複数なされている。こうした傾向は、Google Books ngram corpus をもとにして 1900 年から 2000 年の 100 年間に米国と英国において制限用法 *that* と *which* の使用頻度がどのように変化したかをまとめた図 2¹でも確認することができる。「NOUN that」と「NOUN which」の検索式でそれぞれのデータを抽出し、各年のそれぞれの頻度を 100 年間の平均頻度で除して相対変化を示したものである。

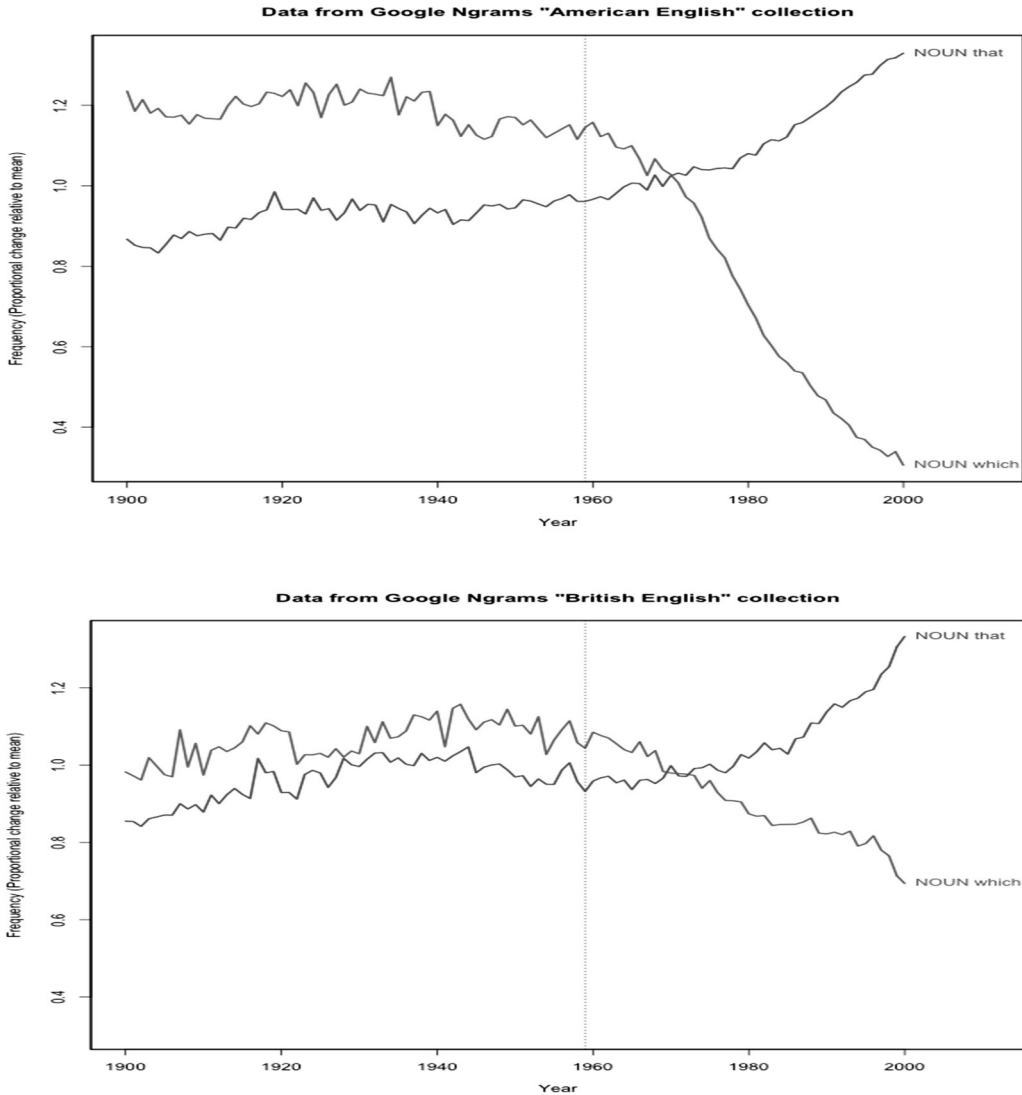


図 2

「NOUN that」や「NOUN which」で検索した場合には当然、I have a dream that my children will one day live in a peaceful nation.や Tell your parents which you

want to buy. に見られるような接続詞 *that* や疑問代名詞 *which* の用例も紛れ込む。これがどの程度の頻度で起こるかは明らかではないが、「NOUN *that*」と「NOUN *which*」で検索される用例の大方は関係代名詞と思われ、*that* の急増・*which* の急減が英米ともに 1960 年頃から始まり、こうした傾向は特に、米国で顕著ということになる。

では、これらの変化の原因は何なのか。現状では、①1900 年代を通じて英語の口語化(colloquialization)が進み、文語的と言われる *which* の使用頻度が減少する一方で、口語的と言われる *that* の使用頻度が増加した、②1960 年頃から *that/which* ルールという「規範主義」(prescriptivism)が浸透した、という 2 つの要因が絡み合っているとの推測が多いように思われる²。因みに、H.W. Fowler の *A Dictionary of Modern English* が英国で出版されたのが 1926 年、*The Elements of Style*, 2nd ed. が米国で出版されたのが 1959 年であり、共に *that/which* ルールを推奨している。

このように制限用法 *which* の使用頻度は、英米で程度の差こそあれ確実に減少している。しかし、それでもなお、英米の careful writers は、*that/which* ルールを時折破って *which* を使用している。その理由を解明すべく、例えば、Moon (2012a) は文構造の複雑さが、careful writers が *which* を選択する要因との仮説を立ててコーパスを用いて分析を試みている。具体的には、関係代名詞を含む文の構造上の複雑さと *which* の選択との間に相関性があるのかを、関係代名詞と先行詞の距離、関係代名詞節の文中での位置／長さ、主格／目的格などの関係代名詞の機能といった観点から分析したが、明確な結論は得られなかったと述べている。また、Hinrichs et al. (2014: 826) はコーパスを用いた分析を行った結果、先行詞句や関係代名詞節が長くなると、*which* が選択される傾向が見られると述べているが、詳細は示していない。

一点注意が必要なのは、NYT の 1985 年と 2018 年のそれぞれ約 100 万語相当の記事に含まれている制限用法 *which* を、筆者が手作業で抽出したところ、次項で示すように、1985 年が 80 例、2018 年が 27 例に過ぎず、表 1 の数字より桁違いに少ないという結果である。Brown, Frown, NYT からの約 100 万語から抽出された制限用法 *which* の数を時系列に沿って並べると、1961 年 1,470 例、1985 年 80 例、1992 年 414 例、2018 年 27 例となる。Brown, Frown, NYT ともに *written-edited-published standard English* であり、*that/which* ルールは基本的に遵守されている筈であり、データのとり方に何らかの問題があるように思われる。一方、データ量は不足だが、英国に関しても *The Economist* 誌の 1988 年 1 月 9 日号と 2017 年 1 月 7 日号のそれぞれ約 6 万語から制限用法の *that* と *which* を手作業で抽出してみた。1988 年が *that*165 例：*which*48 例、2017 年が同じく 214 例：24 例で、これを単純に 100 万語に換算すると 1988 年が 2,714 例：790 例、2017 年が 3,492 例：228 例となる。LOB、F-LOB、*The Economist* からの制限用法 *which* の数を時系列に沿って並べると 1961 年 2,092 例、1988 年 790 例、1991 年 1,858 例、2017 年 228 例となり増減の仕方が不自然と思われる。最近の英国と米国の一流紙を読んでいると制限用法と *that* と *which* に出くわす頻度は *that* を 100 回とした場合に、*which* は英国の場合に 10 回程度、米国

の場合には *which* の比率はこれを大きく下回るとというのが、筆者の実感である。

3. NYT 1985 年、2018 年と Orwell 1946 年にみる制限用法 *which* の用法と使用頻度

NYT による関係代名詞制限用法 *which* の最近と過去の用法を比較するために、米国 Gale 社の電子ジャーナル Academic OneFile (以下、AOF) に掲載されている NYT のフルテキスト記事を参照した。AOF が提供する最も古い記事が 1985 年 1 月 1 日付であるため、そこから数えて約 100 万語になる 1 月 8 日までの記事を資料とした。ワード文書に貼り付けて検索したところ疑問代名詞、関係代名詞など総計 2,216 の *which* が抽出され、手作業で分類したところ、80 の関係代名詞制限用法と見られる *which* が得られた。2018 年に関しても同様に 8 月 21 日付から数えて約 100 万語となる 8 月 28 日までの記事を資料とし、総数 2,042 の *which* から 27 の制限用法 *which* と見られる用例が得られた。一方、Orwell のエッセイの語数はわずかに 5,296 語だが、制限用法 *which* と思われる用例は 19 に上った (ただし、エッセイ中、例文として用いられて他者が書いた *which* は除外した)。

これらの制限用法 *which* の用例を分析する前に、NYT のスタイルブックが関係代名詞制限節の *that* と *which* の用法をどのように解説しているか見てみよう。

Use *that*, not *which*, in a restrictive clause—a clause necessary to the reader’s understanding of the sentence: *The town that the pitcher calls home is tiny Hawley, Pa.* (The sentence serves no purpose without *that the pitcher calls home*.) Note that there are no commas around the clause. In a nonrestrictive clause—one providing added information, not essential to understand the sentence—use *which*, preceded by a comma: *Hawley, Pa., which the pitcher calls home, is tiny.* (The sentence is understandable without *which the pitcher calls home*.)³

つまり、制限用法では *that* を、非制限用法ではカンマを付して *which* を用いるという *that/which* ルールである。英米のメディアは記者や編集者がニュースを作成する際の語法上の注意点を自社のスタイルブックに纏めており、「バイブル」と称されることもある。言い換えれば、バイブルに記されている *that/which* ルールを破る場合には、それなりの理由がある筈であり、それが *careful writers* が制限節で用いる *which* の用法ということになる。しかし、筆者が知る限り、その用法のごく一部と思われるものを自社のスタイルブックで明らかにしているメディアは次の 2 社のみである

① *Associated Press* :

He said Monday that the part of the army which suffered severe casualties needs reinforcement.⁴ (*which* を用いて、異なる品詞の *that* の混在の混在を避けている。)

② *The Economist* :

We have left undone those things which we ought to have done.⁵ (those things

that という *th*-音の耳障りな連続を避けている。ただし、*The Economist* の用例を調べると、原則として 2 つまでは容認しているように思われる。)

しかし、上記のみで NYT や Orwell (さらには、米国や英国の一流メディアや英米のフィクションやノンフィクションなど) の制限用法 *which* の用法を包括的に理解することは不可能である。そこで、*which* の選択に関わると思われる筆者がこれまでに収集した上記以外の要因を次に列記する。

③ Barbara Wallraff:

米 *Atlantic Monthly* の編集者であった Wallraff は “a book about misbehavior which I very much enjoy”⁶ に見られるような “exceptional *which*” と呼ばれる用法があると言う。この *which* は先行詞が直前の *misbehavior* ではなく、より離れた *book* であることを示し、*misbehavior* が先行詞の場合には *that* が用いられるとのこと。)

④ H.W. Fowler:

A hatred of the rule that is not only unable to give them protection, but which strikes at them blindly & without discrimination. What has caused the change from *that* to *which* here is the writer’s realizing that *but that* is somehow undesirable ; it is so, because of the repugnance of *that*, mentioned above, to being parted from its antecedent. . . .⁷ (*that* と *which* の先行詞はともに *rule* であるが、書き手が *that* を繰り返さずに *which* を用いた理由を Fowler は、遠く離れた先行詞を *that* で修飾することに「強い違和感」を感じるためと解説している。逆に言えば、先行詞が遠く離れている場合には *which* が選択される可能性があることになる。)

⑤ Wilma R. Ebbitt & David R. Ebbitt:

*He had an exploratory operation for cancer which the doctors were reluctant to undertake but which he was convinced he needed.*⁸ (この文は NYT のピューリッツァー賞受賞記者 David Halbertstam によるものだが、Ebbitt & Ebbitt は関係代名詞節が繰り返しを明示するために、多品詞の *that* を避けて *which* が用いられていると指摘する。④の *that ... which* とは異なるアプローチである。なお、④の用例に見られるように、関係代名詞が並立する場合に最初を *that*、二つ目を *which* とする用例もみられる。)

⑥ John F. Genung:

*That sounds ill when separated from its verb and from its antecedents, and emphasized by isolation: There are many persons that, though unscrupulous, are commonly good tempered, and that, if not strongly incited by self-interest, are ready for the most part to think of the interest of their neighbors. Here who would be better.*⁹ (*that* はその先行詞や動詞から離れていると違和感があるという。

先行詞との距離に関しては前述の Fowler と同様の指摘であるが、関係代名詞とその動詞の間に挿入がある場合に *which* が選択される可能性を示唆している。)

⑦ John B. Bremner:

An exception to the that / which general principle is the use of relative which after the demonstrative that, this, those, these, as in “Give me only that which (better what) I seek” or “Give me only those books which I asked for.”¹⁰ (上記②と類似。)

⑧ *The Economist*:

*Facebook keeps buying firms which could one day lure users away: first Instagram, then WhatsApp and most recently tbn, an app that lets teenagers send each other compliments anonymously. (The Economist, January 18, 2018) (先行詞と関係代名詞節に記載されている事柄に関する例示や説明が関係代名詞節の後にコロン、ダッシュ、カンマ、括弧などを介して記述される時に *which* が用いられることが多い。)*

⑨ *The Economist*:

*Some of the new demand comes in countries which used to sell gas, not consume it. Egypt has stopped exporting LNG in order to keep domestic supply plentiful and cheap. Gas consumption is rising fast in Indonesia and Algeria, once seen as dependable exporters. (The Economist, March 31, 2014) (先行詞と関係代名詞節に記載されている事柄の例示が後続の 2 文に示されているが、このように関係代名詞を含む文とコロンやダッシュなどで結び得るような密接な内容を含む文が続く場合に *which* が用いられる傾向がある。)*

⑩ Carl Bernstein and Bob Woodward:

Mrs. Graham was told by a close friend who had ties to the administration that the phones of several Post reporters and news executives were tapped. A sweep which was conducted by electronics experts for a fee of \$5000 turned up nothing.¹¹ (先行詞と関係代名詞節に記載されている事柄に関する背景が、前文に書かれていることを示していると言えよう。)

⑪ *Statesman Journal*:

*Berny supported Dick in developing the Fosbury Flop, a jumping style that revolutionized the high-jump event and which is used universally by high-jumpers today. (The Statesman Journal, June 1, 2013) (2 つ目の関係代名詞 *which* の先行詞は *style* であるが、もし *that* を使ったとすると、*a jumping style that revolutionized the high-jump event* を指す指示代名詞と勘違いされる可能性がある。)*

⑫ *The Economist*:

Last year’s trade deficit partly reflected some temporary factors, notably the earthquake and tsunami which disrupted production and exports. (The

Economist, January 14, 2012) (*the earthquake and tsunami*は2011年3月の東日本大震災を指しており、この *which* は本来は非制限用法でカンマが必要である。しかし、カンマがあると先行詞が *factors* と誤解される可能性があるため省略されたと思われる。)

上記の①～⑫の用法は、小西(2015, 2016, 2017, 2018)で詳細に検討したが、いずれの場合も *that/which* ルールが意図的に破られ、その結果、①～⑪では *that* に替えて *which* が選択され、⑫では本来あるべきカンマが省略されている、と思われる。

that と *which* の用法を比較するには *that* の機能上の特徴も理解する必要があるが、careful writers はどのように捉えているのであろうか。この問いに対しては、上述④にある Fowler の *repugnance of that . . . to being parted from its antecedent* と、⑥にある Genung の *That sounds ill when separated from its verb and from its antecedents, and emphasized by isolation* が参考になる。*that* が持つこうした特徴は、native speaker が持つ音感に属するものと思われる。

ではこれとの比較において、用法①～⑫に見られるような *which* の用法を careful writers はどのように捉えているのだろうか。この点に関して、日本文学の英訳に際し、*that/which* ルールを遵守しつつも、①～⑫に見られるのと同様に *which* を時折用いる米オレゴン大学の Stephen Kohl 氏に同氏自身が書いた制限用法の *which* の用例を示して *which* の選択理由を尋ねてみた。同氏の説明は読んでじっくりくる方(“what sounds right”)を選んでいるが、個々のケースでなぜ *which* が *that* よりもじっくりくるかを説明することは不可能とのことであった。この点に関しては、小西(2018: 62-63)でも引用したノーベル文学賞を受賞した米国人小説家 Saul Bellow の発言も参考になる。同氏は米 *Boston Globe* 紙に寄稿した1994年3月10日付エッセーで次の文を書いている(下線筆者)。Give us a week’s moratorium, dear Lord, from the idiocies that burn on every side and let the pure snows cool these overheated minds and dilute the toxins which have infected our judgments. この *which* に関して、米国の作家・ジャーナリスト William Safire 氏が Bellow 氏に *which* ではなく *that* を使うべきでは、と指摘したところ、次の返事があったと自らの *The New York Times Magazine* の2005年5月1日付コラムに記している。I am only fair at relative pronouns. I do know the restrictive from the nonrestrictive. “Which” sounded better than “that,” and I do go by sounds as well as by grammar. これは、Kohl 氏と同様のコメントと言えよう。

では、native speaker が *which* に対して持つ音感とはどのようなものなのか。この問いに対しては、小西(2015: 18)で次の2人の米国人言語学者の見解を紹介した。Hall は Which is a heavy and rather ugly word, hard to pronounce rapidly and smoothly; that slides off the tongue much more easily.¹²と述べている。また、Genung も That is not a good word to pause upon; when therefore it comes just at a pause who or which will often sound better.¹³と述べており、両者の感覚は一致している。また、最

近では Pinker が *which* の *ch* 音に関して *the ugly sibilance of which*¹⁴と言及している。*that* の滑らかさ・軽快感とは異なり、*which* には「耳障りな歯擦音」が含まれるため、鈍重さ・硬さ・強調感があるということだろうか。

Fowler、Kohl、Bellow、Hall、Genung が指摘する「感覚」が careful writers が制限用法の関係代名詞 *that* と *which* に対して持つものであれば、両者は例えて言えば、交差点の信号のような役割を果たしていると言えまいか。交通の流れ[つまり、文(章)の流れ]に特段の注意を払う必要がなければ(つまり、関係代名詞の先行詞や関係代名詞節に特段の注意を払う必要がない場合には速やかに読み進めるように)、青信号(*that*)を点灯させる。しかし、注意が必要な場合には(つまり、先行詞が見極め難い、あるいは先行詞に関する追加情報が当該文の先行文脈に記載されている、あるいは関係代名詞節の構造が長く複雑、あるいは当該文の後続文脈に例示などがなされている、といった場合には)黄信号(*which*)を点灯させて、交差点に接近するドライバーに徐行の指示を与えて注意を喚起する[つまり、読者にスローダウンの指示を出して文(章)の要所を点検させる]といった具合である。

このように考えてみると、careful writers にとっての制限用法の *which* は、感覚的には *that* と非制限用法 *which* の機能を併せ持ち、遠く離れた先行詞を修飾しうのみならず、後続文脈にも作用しうる機能を有するのではなかろうか。本稿の主題は、NYT の関係代名詞制限用法 *which* の用法が 1985 年と 2018 年の約 30 年にどのように変化したか、及び 1940 年代の Orwell の用法と違いがあるのかを考察することであるが、①～⑫の用法をより「感覚的」に捉えて次の(a)～(g)の 7 つに再分類して NYT 並びに Orwell の用法を考察することは、制限用法 *which* の機能を考察する上でも有益かも知れない。

- (a) 当該文(関係代名詞と先行詞を含む文)に先行する文脈に注目(上述の用法⑩に相当し、先行詞と関係代名詞節に記載されている事項を補う重要な情報が記されている)
- (b) 当該文内で関係代名詞の前方に注目(用法③、④:先行詞が関係代名詞から離れている)
- (c) 当該文内で関係代名詞の後方に注目(用法⑥、⑧:関係代名詞節の構文が複雑、あるいは先行詞と関係代名詞節記載事項の例示がある)
- (d) 当該文に後続する文脈に注目(用法⑨:当該文の先行詞と関係代名詞節に記載されている事柄の例示)
- (e) 当該文内の *th*-音の連続(時に *wh*-音の連続)による音韻上の問題を回避(用法①、②、⑦)
- (f) 当該文内の構文の明示(用法⑤、⑪:複数の関係代名詞節を包含。)
- (g) 非制限用法 *which* のカンマを省略し、文の結びつきを明示(用法⑫)

その上で、1985 年と 2018 年の NYT 各約 100 万語と 1946 年の Orwell 約 5000 語に見られる制限用法(並びに非制限用法に見える) *which* を次表のように分類してみた。42、46 などの番号は筆者が用例の整理のために付した番号、星印は引用符内にある

which の用例を示す。〈法律文書の *which*〉とした用例 75~78 は起訴状からの引用であるため、法律文書などで用いられる文語的でフォーマルな *which* と見なした。また、最終行にはなぜ *which* が用いられたのか筆者には理解できない用例 2 例を記載した[(A) 18 は photo caption 中で用いられている *which*、(B) 6* は 1800 年代に書かれた手紙からの引用である]。

	(A)	(B)	(C)
<i>that/which rule</i> を破って <i>which</i> を選択したと推察される要因が存在する箇所	NYT 1985 年 総語数：約 100 万 用例数：80	NYT 2018 年 総語数：約 100 万 用例数：27	Orwell 1946 年 総語数：5,296 用例数：19
(a)〈当該文に先行する文脈〉	42, 46, 51, 52, 65*		10
合計	5 例	0 例	1 例
(b)〈当該文内で関係代名詞の前方〉	9, 11*, 12*, 15*, 19*, 22*, 36, 37, 39*, 41, 45, 49*, 57, 58, 63, 71*, 73*	4*, 8*, 12, 13, 21, 22, 24, 26	9, 11, 17, 18
合計	17 例	8 例	4 例
(c)〈当該文内で関係代名詞の後方〉	1, 6*, 25, 27*, 33*, 48*, 53, 57, 62, 67*, 68, 69, 70, 72	1, 15	3, 4, 16,
合計	14 例	2 例	3 例
(d)〈当該文に後続する文脈〉	17*, 21*, 23*, 30*, 40*, 43, 44, 54	5*, 9*	5, 6, 7, 8
合計	8 例	2 例	4 例
(e)〈当該文内の音韻上の問題回避 (<i>that, this, those, these</i> が同文中に存在)〉	2, 3*, 8*, 14*, 20, 24*, 26*, 28*, 31*, 32*, 34*, 35, 38*, 55*, 56*, 64*, 66*, 74*, 79*	2*, 3*, 7*, 11, 16*, 18*, 20*	1, 15
合計	19 例	7 例	2 例
(f)〈当該文内の構文の明示 (<i>that (or which) ... and (or but) which</i> など)	7, 10, 47, 59*, 60*, 63	14	2, 12, 13, 14
合計	6 例	2 例	4 例
(g)〈非制限用法 <i>which</i> のカンマ省略〉	4, 5, 13, 16*, 29, 50, 61, 80	10, 17, 19, 23, 25*, 27*	17
合計	8 例	6 例	0 例
〈法律文書の <i>which</i> 〉	75*, 76*, 77*, 78*		
合計	4 例		
〈用法不明〉	18	6*	

表 2

4. 用例の考察

用例を考察する前に 1 点検討を要する点がある。それは星印を付した合計で 28 (の用例 NYT からの用例の 25% に相当) の取り扱いである。 *The New York Times Manual of Style and Usage* に引用に際する NYT の編集方針が次のように記されている。

Readers have a right to assume that every word between quotation marks is what the speaker or writer said. The Times does not “clean up” quotations. If a subject’s grammar or taste is unsuitable, quotation marks should be removed and the awkward passage paraphrased.¹⁵

つまり、引用符が付されている場合には、発言内容を一字一句違わずに記載する編集方針ということになり、NYT 自身の用法とは異なる可能性がある。紙幅の制限があるので以下に(A) NYT 1985 年、(B) NYT 2019 年、(C) Orwell 1946 年から分類別に限られた用例を考察するが、星印が付されている用例は考察対象から除外した。(下線と太字は筆者。<>内は用例番号)

(a) <当該文に先行する文脈>

(A) <51> The authors have provided a meticulously detailed yet easy-to-comprehend analysis of each coin in the series, covering such matters as varieties, die defects, identification keys and rarity ratings. They have pinpointed 151 different varieties of early dimes. . . . To help readers identify their own coins, the authors have devised a number of convenient charts which offer a shorthand method of comparing such pieces with known varieties.

実線下線部の「10 セント硬貨の判明している種類を比較するための簡便ないくつかのチャート」に関する補足情報が先行文脈の点線下線部に記されている。

(B) 用例なし

(C) <10> 2. Above all, we cannot play ducks and drakes with a native battery of idioms which prescribes egregious collocations of vocables as the Basic *put up with* for *tolerate*, or *put at a loss* for *bewilder*.

Professor Lancelot Hogben (Interglossia)

.....

Professor Hogben (2) plays ducks and drakes with a battery which is able to write prescriptions, and, while disapproving of the everyday phrase *put up with*. . . .

第 1 文は Hogben による文章からの引用で、第 2 文が Orwell 自身のもの。Hogben の主張は「ベーシックな慣用表現で、低レベルな語を組み合わせた *put up with* や *put at a loss* のように多くが使う(native)表現を節度なく選択するのではなく、*tolerate* や *bewilder* を用いるべき」といった内容である。日常的な表現(everyday

English)の使用を推奨する Orwell は、Hogben が法規定を書く際に使うような類 (battery) の表現を用いることを重視している、と批判している。battery の例示 (ここでは *tolerate* と *bewilder*) が先行文脈にあることを示すために *which* が用いられていると思われる。先行詞 *battery* と例示の間に 2,528 語の距離があることが注目される。

(b) <当該文内で関係代名詞の前方>

(A) <36> On the first level is a retaining wall in opus quadratum—thick walls of large rectangularly hewn stones—which supported the first level of the temple. *wall* が先行詞であるが、離れているために *which* が用いられている。

<37> Patients are leaving hospitals earlier, and staying out of nursing homes longer, to avoid soaring health care costs, a trend which has meant greater demands for new types of home health-care.

trend は主節全体の内容と同格関係にあり、真の先行詞が主節全体であるため *which* が用いているように思われる。本質的には非制限用法と見なすべきかも知れない。

(B) <12> Fake change isn't evil; it's milquetoast. It is change the powerful can tolerate. It's the shoes or socks or tote bag you bought which promised to change the world.

先行詞句が長く、しかも *you* の前に関係代名詞の省略がある。

<13> Tinling, the only designer in the tennis Hall of Fame, made the eyelet frocks that became synonymous with Tracy Austin, encapsulating her youthful spirit, and which she wore when she won the Open in 1979 and 1981. 先行詞である *eyelet frocks* と二つ目の関係代名詞の距離が遠い。

(C) <9> One of these is superfluous, making nonsense of the whole passage, and in addition there is the slip—*alien* for *akin*—making further nonsense, and several avoidable pieces of clumsiness which increase the general vagueness. 関係代名詞の先行詞は *several avoidable pieces* で距離が離れている。

<18> Never use a metaphor, simile, or other figure of speech which you are used to seeing in print.

先行詞句が長い。

(c) <当該文内で関係代名詞の後方>

(A) <68> The urgent and imperative requirement is management—a traffic control center for Long Island which would oversee local, state and interstate jurisdictions, coordinating with New York City, controlling signals, and monitoring a force of traffic police.

関係代名詞節が 3 つの分詞構文を従えており、節の構造が長く複雑。

(B) <1> Mine contained demands which should be self-evident, such as the ability to move around freely during labor, to choose the delivery position, and to have my husband present in the delivery room, as well as a long list of potentially harmful, but nonetheless routine interventions that I didn't want, such as pubic shaving, the administration of an evacuation enema, and the artificial rupture of membranes.

関係代名詞節が極めて長く、構造が極めて複雑。

(C) <3> A newly invented metaphor assists thought by evoking a visual image, while on the other hand a metaphor which is technically 'dead' (e.g. iron resolution) has in effect reverted to being an ordinary word and can generally be used without loss of vividness.

関係代名詞節が先行詞の例示を括弧書きで包含している。

(d) <当該文に後続する文脈>

(A) <44> My husband designed a planter which would never be without water. It was nothing complicated, just a handsome walnut board into which was fitted a large bread tin with a dime-size hole cut out of the bottom. Having filled the bread tin with soil and one of my home-grown creeping figs, I removed the top of the toilet tank in the downstairs bathroom and replaced it with the planter.

水がなくならないという *planter* の詳細が後続の文章に記述されている。

(B) 用例なし

(C) <5> These save the trouble of picking out appropriate verbs and nouns, and at the same time pad each sentence with extra syllables which give it an appearance of symmetry. Characteristic phrases are render inoperative, militate against, make contact with, be subjected to, give rise to, give grounds for, have the effect of, play a leading part (role) in, make itself felt, take effect, exhibit a tendency to, serve the purpose of, etc., etc.

先行詞 *extra syllables* の例示が、後続文にあるため *which* を用いている。

(e) <当該文内の音韻上の問題回避 (*that, this, those, these* が同文中に存在) >

(A) <2> But it is this mediocre Mauerbach trove which, Austrian officials say, has been described periodically by the foreign press as "the Toplitzsee of art."

(ただし、用法⑥のように、関係代名詞の直後に挿入があることも *which* が選択された要因である可能性もある。)

(B) <11> These burrows may eventually reach 30 to 70 inches long and contain several chambers which shelter developing young.

(C) <1> Underneath this lies the half-conscious belief that language is a natural growth and not an instrument which we shape for our own purposes.

(f) <当該文内の構文の明示 (*that* (or *which*) ... *and* (or *but*) *which* など)>

- (A) <10> The regulations, according to I.R.S. officials, are an attempt to establish ground rules in an area of tax law in which there is some confusion and which has been the subject of much debate among the I.R.S., the public and Congress.
構文の明確化のために *which* を繰り返している。
- (B) <14> Look for a property that offers immersive activities which take kids out to see their surroundings—it could be hitting the beach to learn about ocean life or getting out into the city to visit a market, museum or other cultural site.
- (C) <2> Modern English, especially written English, is full of bad habits which spread by imitation and which can be avoided if one is willing to take the necessary trouble.

(g) <非制限用法 *which* のカンマ省略>

- (A) <29> I knew it was offensive to them to have a regular subway rider in the house, constantly reeking of the overflowed-toilet smell which makes it so easy to distinguish the subway rider from humanity.
which の前にカンマがあると、先行詞を確かめるために *house* またはその前の箇所の一瞬、注意が引き付けられて読み難くなる。
- (B) <17> The museum is in the process of photographing and digitizing its enormous archive which, when completed, will be available on the hall's website.
“. . . archive, which, when completed, will be . . .” のカンマの連続を回避。
- (C) 用例なし

5. まとめ

第3項で考察したように、①～⑫の用法をもとにして7分類すると NYT1985年、NYT2018年、Orwell1946年に見られる制限用法（および、NYT1985年と2018年ではカンマが省略されている非制限用法）の *which* が文（章）中で果たしている機能の輪郭が捉えやすいように思われる。さらに、本稿で考察した用例は NYT の記事と Orwell の一エッセーから抽出したもののだが、①～⑫で示した用例も含めて考えると、英米の *careful writers* が *that/which* ルールを意図的に破って用いる制限用法 *which* の用法には共通性があるように思われる。

一方、NYT1985年とNYT2018年を比較すると制限用法 *which* の用例は80例から27例へ大幅減となっている。さらに、Orwellの5,296語のエッセーに含まれる19例は100万語ベースの頻度に単純に換算すると3,588例となる。前述の *The Economist* 誌の用例数の変化も考慮に入れば、1900年代初めから進行していると言われる制限用法 *which* の使用減は確実に進行していると言えよう。

しかし、この減少がどの用法で、どのような理由で起きてきたかを探るためには、

より広範な用例の分析と合わせて、*that* の用法の変化を検討する必要があり、今後の課題としたい。[ちなみに、近年の米国一流紙では、*What will Trump do if he is convinced that Cohen does have information that could end his Presidency and destroy his family?* (*The New Yorker*, July 2, 2019)のように接続詞と関係代名詞 *that* を同文中で使用することを容認する傾向があり、これだけでも *which* の使用頻度は大幅減となる可能性がある。]

注

- 1 Liberman (2015)を参照。
- 2 例えば、Leech et al. (2009), Moon (2012), Hinrichs et al. (2014)を参照。
- 3 *The New York Times Manual of Style and Usage* (1999: 331)
- 4 *The Associated Press Stylebook and Briefing on Media Law 2015* (2015: 94)
- 5 *The Economist Style Guide* (2010: 148)
- 6 Wallraff (2000: 116)
- 7 Fowler (1926:637)
- 8 Ebbitt and Ebbitt (1990:257)
- 9 Genung (1896:129)
- 10 Bremner (1980:370)
- 11 Bernstein and Woodward (1974: 206)
- 12 Hall (1917: 301)
- 13 Genung (1896: 129)
- 14 Pinker (2014: 122)
- 15 *The New York Times Manual of Style and Usage* (1999: 280)

参考文献

- Bernstein, Carl and Bob Woodward. 1974. *All the President's Men*. New York: Simon & Schuster)
- Bremner, John B. 1980. *Words on Words*. New York : Columbia UP
- Ebbitt, Wilma R. and David R. Ebbitt. 1990. *Index to English*. 8th ed. New York: Oxford University Press
- Fowler, Henry W. 1926. *A Dictionary of Modern English Usage*. London: Clarendon
- Genung, John F. 1896. *The Practical Elements of Rhetoric: With Illustrative Examples*. Boston: Ginn & Company
- Hinrichs, Lars; Benedikt Szmrecsanyi; and Axel Bohmann. 2015. WHICH-HUNTING AND THE STANDARD ENGLISH RELATIVE CLAUSE. LANGUAGE 91, NUMBER 4, 806-836

- Hall, J. L. 1917. *English Usage: Studies in the History and Uses of English Words and Phrases*. Chicago: Scott, Foresman and Company
- Leech, G.; M. Hundt; C. Mair; and N. Smith. 2009. *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*. Cambridge: Cambridge UP.
- Liberman, Mark. "Which-hunting—and relative decline?" *Language Log*, December 18, 2015. <https://languagelog.ldc.upenn.edu/nll/?p=22859> (accessed June 1, 2019)
- Moon, G. 2012a. Observatio0n and Remarks on Relative Pronoun Variation in English. *Linguistic Research* 29, 281-297.
- Moon, G. 2012b. The Wicked Which Hunt: The Decline of Which-Relatives in 20th Century American English. *English Language and Linguistics* 18.3, 171-196
- Pinker, S. 2014. *The Sense of Style*. New York: Allen Lane
- Siegal, Allan M. and William G. Connolly. 1999. *The New York Times Manual of Style and Usage*. New York: Three Rivers Press
- The Associated Press Stylebook and Briefing on Media Law 2015*. New York: Basic Books
- The Economist Style Guide*. 2010. London: Profile Books
- Wallraff, B. 2000. *Word Court*. Orland: Harcourt
- 小西和久 (2015) 「英文メディアにみる exceptional *which* に関する一考察」 *The JASEC Bulletin*, 24 (1), 1-24
- 小西和久 (2016) 「関係代名詞制限節の *which* について—Barzun の用法に対する Williams と Bolinger のコメントをめぐって—」 *The JASEC Bulletin*, 25 (1), 17-31
- 小西和久 (2017) 「英文メディアの同格表現にみる制限用法関係代名詞 *that/which* の選択要因につて」 *The JASEC Bulletin*, 26 (1), 21-35
- 小西和久 (2018) 「関係代名詞の *that/which rule* が破られる一要因—関係代名詞の意味を補足する重要な丈夫が先行文脈に含まれる場合」 *The JASEC Bulletin*, 27 (1), 51-65